

同志社大学
2012年度 卒業論文

論題：「コリアン系日本人」の可能性
—在日コリアン青年のインタビュー調査を事例に

社会学部社会学科
学籍番号：19081023
氏名：石川 明日香
指導教員：立木 茂雄
(本文の総字数： 22716 字)

ID:19081023

石川明日香 「コリアン系日本人の可能性」—在日コリアン青年のインタビュー調査を事例に

[キーワード] 在日コリアン アイデンティティ 民族性

在日コリアンの在り方は実に多様化してきている。その中でも青年期に入る若者のアイデンティティの持ちようは実に様々である。これまでの研究では、韓国・朝鮮籍の保有した者に焦点を当てた研究がなされてきた。またそれらは、朝鮮学校での民族教育を受けたものが対象者のほとんどを占めていた。しかし在日コリアンの多様化が進む今日においては、在日コリアン青年の全体像を捉えるには疑問が残る。

そこで本論文では、朝鮮学校の民族教育を受けておらず、なおかつ在日同胞学生会に属していた青年たちに焦点を当て、インタビュー調査を行った。また日本国籍保有者やダブルの青年たちも視野に入れて調査を行った。同団体が在日コリアンの青年たちの自我意識にどのような影響を与えたのかを探る目的である。

本調査の結果、在日コリアンの青年たちは、日本と朝鮮本土の民族、両者に帰属意識を抱いており、朝鮮本土の民族にこだわりを見せながらも、自己を確立するうえで日本を選択していることが明らかになった。

目次

1. 序	1
2. 先行研究	2
2-1. アイデンティティについて	2
2-2. 在日コリアンのアイデンティティについて	3
2-3. 在日コリアンの青年たち	4
3. 研究方法	6
3-1. 調査目的	6
3-2. 調査対象	6
3-3. インタビュー調査の概要	7
4. 調査結果および考察	8
4-1. 入会前後の様子	8
4-2. 入会してよかったこと	9
4-3. 印象に残っているエピソード	11
4-4. 学生会を振り返って	13
4-5. 思い出の共通点	16
4-6. 現在の心境の共通点	16
4-7. 「コリアン系日本人」という可能性	17
5. 結論	18
参考文献	20

1. 序

今日の日本において在日韓国・朝鮮人（以下、在日コリアン）のありかたは実に多様化してきている。しかしこの多様化の中で在日コリアンの青年たちが、何世代も前から共通して抱える問題がある。それは、彼らが自分自身をどのように解釈し表現するかという、アイデンティティの問題である。在日コリアンにとって、“異国”である日本での生活では、このアイデンティティの持ちようがかなり重要な意義を持っている。

朝鮮本土にルーツを持ちながら、歴史的背景によって、日本で生まれ育つ在日コリアンは、帰属意識を持て余す傾向がある。日本でもなければ、韓国・朝鮮でもない。この狭間のなかで、在日コリアンの青年たちは葛藤し成長していくのである。今の時代の在日コリアン青年にあたる 3 世がその青年期を迎えるようになり、「在日コリアン」のアイデンティティの確立が新たな問題として生まれた。3 世の民族アイデンティティとの葛藤は、2 世のそれよりも更に複雑なものとなっている。社会的な呼び方も、「朝鮮人」から「在日朝鮮人」になり、さらに韓国籍者と朝鮮籍の総称という意味の「在日韓国・朝鮮人」へと移行し、「韓国・朝鮮」という表現をより総合的に、より簡潔にするため、「在日コリアン」と呼ぶようになった。また非公式の場では（ときに公式の場においても）、たいてい「在日」といえば旧植民地時代からの子孫であるコリアンという意味で充分通じるようになっている。そんな呼称の変化が示すように、最近では 3 世が自分のことを表現するのに最適な言葉がないことから、在日コリアン 3 世のアイデンティティの確立が困難になっていることが分かる。

筆者は在日 3 世として日本に生まれ、朝鮮学校に通い民族教育を受け、在日コリアン社会に属してきた。また高等教育からは日本の学校に通い日本社会にも属してきた。上記のとおり、在日コリアンの一青年として、アイデンティティについて思い悩んだこともある。日本社会に属するようになって少ししてから、『在日同胞学生会』（後述あり。以下、学生会）なるものに出会った。この学生会で筆者は、民族学校では出会ったことのない在日コリアン青年たちの葛藤を目にすることになる。本論文に取り掛かるうえで、テーマを『在日コリアンのアイデンティティ』にした方がいいが、前述したとおり在日コリアンのありかたは実に多様化している。そこで本論文では、この学生会をメインにとりあげ、これが在日コリアン青年たちのアイデンティティ形成とその確立にもたらす影響について考察していくこととした。

学生会は 1960 年代より続いており、その卒業生は 1950 年代生まれの人たちまでいる。その中で今回の論文では在日コリアン 3 世に的を絞って考察しようと思う。その在日コリアン 3 世の世代は、筆者自身が属する世代であり、同世代の在日コリアンの仲間たちが学生会を通じて在日コリアンとしての自我意識、アイデンティティがどのような変化を遂げてきたのかについて調査した。

在日コリアン 3 世に属する『学生会』卒業生のインタビュー調査からアイデンティティを獲得する過程を明らかにし、その条件を描き出すことを目的とする。具体的には、筆者

が携わった『在日同胞A県学生会』を研究対象とし、成人した卒業生を対象に実施したインタビュー調査を題材とする。

2. 先行研究

2-1. アイデンティティについて

「アイデンティティ」という言葉を考察するうえで、エリック・エリクソン (Erik. H. Erikson) が挙げられる。彼はフロイト研究を基にしながら、さらに独自の方向に発展させた。彼は独自のライフ・サイクル論で、人間の人生を八個からなる発達段階に分けた。その第五段階目である「青年期 (13～22 歳)」に「アイデンティティ」、つまり「自我同一性」が確立するものとした。この期間に確固としたアイデンティティが発達していないと、いわゆる「同一性拡散」、アイデンティティの危機といわれる状況に陥る。

しかし彼によればアイデンティティとは、その存在すらもわからないような無意識の領域にあるもので、実際に彼自身も、アイデンティティについて考えれば考えるほど、不可解になっていくという (エリクソン 1973 年)。このことから、アイデンティティという言葉の指し示す内容が難しいことがわかる。

こうしたエリクソンによるアイデンティティは、社会学の見地からは「自己アイデンティティ」といわれるが、社会学者が取り上げるアイデンティティには、この他に「社会的アイデンティティ」もある。この社会的アイデンティティと自己アイデンティティは密接に関連している。自己アイデンティティが自己を成り立たせる人間の根幹を成す。そして、それが確立したうえで社会的アイデンティティがさらに自己をたしかなものにするようだ。

イギリス社会学の中心的人物の一人であるアンソニー・ギデンス (Anthony Giddens) は、自己アイデンティティと社会的アイデンティティを定義している。ギデンスによれば、私たちが自分自身について、また私たちを取り巻く世界との関係性について、独自の意識を組み立てていく自己発達の過程を指し示すものが自己アイデンティティだという。この自己アイデンティティは、互いに異なった一個人としてひとりひとりを際立たせる役割を果たす。人が独自の意識を組み立てていくためには、外部の世界との関わりが非常に重要な意味を持つ。人は周囲の者、つまり「他者」と比較検討することによって、自分が何者であるかを発見し、徐々に自己を確立していくとギデンスは言う (ギデンス 2004 年)。

では、「社会的アイデンティティ」とは何であろうか。ギデンスによると、社会的アイデンティティとは、一人の人に備わるとみなす特徴や性格のことだという。自己アイデンティティが、自己を確立させる役割を果たし、その一方で、社会的アイデンティティは、他者と同じ存在であることを示す役割を果たしているのである。

社会的アイデンティティの特徴は、人はたいてい誰もがそのような属性を複数所持しているということである。私は、アジア人であり、在日コリアンであり、大学生である。これらの複数の属性が、ときに人々を混乱させることがありうる。複数の属性をうまく使い

分けることができずに混乱に陥る例として、エスニック・アイデンティティとナショナル・アイデンティティとの不一致や両立が難しいことに悩むマイノリティの場合が挙げられる。

このアイデンティティの確立していない状態が、エリクソンの「アイデンティティの危機」という状態なのであろう。青年期には、こういう状態に陥るものが多い。しかしその時期を過ぎると、ほとんどの人は、時間と場所を超えて明らかに連続する最重要なアイデンティティを軸に、自らの生の意味と経験を体系づけていくと、ギデンスはいう（ギデンス 2004年）。

アイデンティティの形成過程について、今日、私たちは社会的にも地理的にも流動性が高くなり、その結果、数多くの選択肢の中から自己を確立できるという恵まれた機会の中にいるとギデンスは説く。しかしこれは逆にいえば、今日、アイデンティティは多面的であり不安定になり、在日コリアンをはじめとして、多くのマイノリティのアイデンティティが危機にさらされているということである。

アイデンティティとは、存在意義を求めてやまない人間精神固有の特性の現れであり、青年期を越えてもなお私たちは絶えず「自分は一体何者であるのか」の問いに対する答えを、様々な場面や人間関係を通して模索していくことになるだろう。

2-2. 在日コリアンのアイデンティティについて

在日コリアンのアイデンティティの模索について、この世代的相違を李光圭が移民の一般法則である「時計の針子の原理」を用いて述べている。というのは、1世を祖国志向、2世を現地志向、3世を再び祖国志向、4世も再び現地志向に向かうと分析している。1世と2世の差異は明確である。1世は無条件、祖国志向的性格を持ち、日本社会から差別されればされるほど祖国志向的になる。2世は1世に反対して現地志向的になる。3世は2世に反対して祖国志向的性格を持つが、1世より情緒的愛情が欠落し、理性的な愛になる。3世の反対に向けた4世も、2世と同様に現地志向であるが、2世のように現地社会に抵抗するのではなく、共に生きる共生社会を目指す運動を展開する。ここでは、生まれた国と自分のルーツを持つ国が異なりはじめた在日コリアン2世以降の世界を考察してみようと思う。

生まれ故郷の国が祖国という1世の祖国は韓国であり、そうであるなら2世の祖国は日本である。しかし当時、単一民族国家の色合いが濃かった日本では、2世への偏見や差別が頻繁にあり、青年であった2世たちは挫折感や混乱に陥りやすかった。現地志向の2世が関心と愛情を生まれ故郷に向けたとき、彼らは日本社会の不当な差別と偏見に直面する。祖国には帰れない現地志向の2世はこれに対し、不安と不快な感情を持ち、対抗する道しかなかった。在日コリアンの1世と2世が違うところは、1世には社会生活で民族団体を中心とする活動が重要であったのに対して、2世は私的性格の市民団体が主な活動の中心であった点である。つまり1世は民族的であり、2世は市民的であった。帰化についても、1世のように背信感や屈辱感はない。しかし、どの世代よりも国籍とは何なのかを問うた世代でもある。

2世の運動は社会的不平等性を立て直すためのものであり、3世の運動は制度的矛盾をなくすためのものであった。2世の運動は限られた市民団体との共同の闘争で目的を達成したが、3世の運動は日本人を含む幅広い市民の協力や支援によって目的を成し遂げた。性格的立場で言うなら、2世の運動は生存権や就業権を含む生活権の問題であったが、3世の運動は人格権の問題であった。これまでの在日世代的特性を、1世を望郷の世代、2世は彷徨の世代、3世は共生の世代と、李は述べている（李 2010年）。

3世は祖国の政治や社会制度に関心を向けるより、祖国の文化に近づきたがる。祖国の文化に誇りを持ちたいのが在日3世の特性である。3世が主導した祖国の文化運動（子供会や韓国祭りなど）は、3世が日本文化に同化され、自信が出来た後に見られる現象である。日本の文化に文化的同化を成し遂げたから自分のルーツを知りたいのである。そしてこれを日本の社会に見せたがる。

4世は3世と似ていながら異なる点がある。似ている面は家庭の生活や結婚観などの私的な領域での社会生活と個人主義的な性格などである。差があるのは祖国観である。4世の祖国観は国から離れた冷静なもので、3世のものより中立的である。または理性的な祖国観といえる。4世的になって初めて完全な意味の祖国観を持つと李は述べている（李 2010年）。在日コリアンが完全な意味の祖国観を持つというのは、在日コリアンとしてのアイデンティティを持つということである。すなわち4世にとって祖国は自分に直接影響を与える存在であり、また自分から独立した存在である。積極的でありながらも独立的である。

「言葉が出来なくても歴史がわからなくても、コリアンという出自を隠さずに生きる堂々たる自尊心が在日韓国人的といい、これが3世とまた違う意味で、これを4世的という（金敬徳 2004）。」

4世的志向の特性は、何よりも日本社会に対する「市民」としての意識である。「民族」に代わる在日社会の新たな理念としての「市民」であり、日本の市民社会の一員として公平な立場で共生を築き上げることができる「市民」である。4世的世界の最も大きな特性は共生社会の建設である。

2-3. 在日コリアンの青年たち

在日コリアンの教育とアイデンティティ形成に関わる先行研究として、ここでは福岡安則・金明秀による『在日韓国人青年意識調査』（1993年）を取り上げる。

福岡・金の調査は、民族団体である大韓民族民団の協力の下、全国の18歳から30歳までの約2000名の在日コリアン青年を抽出して、全国規模でランダム・サンプリング調査を実施した。なお、この母集団は「日本生まれで、韓国籍を持つもの」に限定している。最終的に回収した800票の調査票の分析を通して、在日コリアン青年のアイデンティティの特徴を明らかにした。この調査は在日コリアンのアンケート結果を分析したもので、在日コリアンに対して全国的規模で行われた初めての意識調査である。

意識調査の分析から在日コリアン青年が内面化している文化は、日本社会の文化と「民

族的文化」が混入した文化であり、その「民族的文化」も本国の民族文化そのものではないという。また、民族的アイデンティティは民族への愛着と民族を求める自負の二つからなるということが調査で明らかにされ、民族的アイデンティティそのものは単一ではないという。調査の最大の発見は、差別や不平等によって民族的アイデンティティが受動的に規定されるのではなく、「獲得」と「継承」という再生過程を持つと確認されたことである。そしてその民族的アイデンティティは、たんに「継承」されていくものでなく、それを新たに創造し、「獲得」していくものだということを明らかにしている。最後に、「日本への愛着」がみられたという。在日のエスニシティの強さや弱さに関わらず、総じて在日コリアン青年の日本への愛着は強いと結論付けられるようだ。この分析を通して、在日韓国人青年は未来を共に築く空間として、すでに日本を選択しているとのことである。

またこの調査では、福岡の「生き方の志向性の 7 タイプ」を使用し、調査対象の在日コリアン青年たちに、自分がどのタイプにあてはまるかを問う項目がある。そのタイプは以下のとおりである。1. 「祖国志向型」祖国の発展、統一のために尽力すること、2. 「同胞志向型」在日同胞の安心を作っていくこと、3. 「共生志向型」日本人との共生を実現すること、4. 「個人志向型」自己実現を成し遂げること、5. 「帰化志向型」日本人と同じようになっていくこと、6. 「葛藤回避型」気楽に生きていくこと、7. 「葛藤型」生き方が見つからない。すると、以下のような結果が出たという。複数回答で多かったのが 3. 「共生志向型」(51.1%)、6. 「葛藤回避型」(46.1%)、4. 「個人志向型」(44.5%)、5. 「帰化志向型」(25.6%) であり、1. 「祖国志向型」(6.3%) と 7. 「葛藤型」(4.9%) はきわめて少なかった。この調査からも、やはり 3 世というのは 1 世や 2 世とは異なり、日本人とコリアンの違いを認め、共に生きる社会を作ることを目指していることがわかる。

在日コリアン青年の多くが成長過程で、民族的劣等感を抱かされている。しかし、成長過程での民族教育が保障されていれば、否定的な自己イメージを抱かずにすむ。成長過程で民族的劣等感を抱いていても、青年期に達すれば多くの青年は民族的劣等感を克服している。民族的劣等感の克服に一定の効果を持つのは、民族教育と民族団体への参加であると、金という(金 1997 年)。

また福岡は、2000 年に実施した在日外国人青年への聞き取り調査で、以下の二点について述べている。ひとつは、「在日」を生み出す歴史性をどう読み解いていくかが重要であるということだ。多様な歴史的背景があるため、彼ら／彼女らの存在を、そうそう簡単にカテゴリーわけできないと福岡はいう。もうひとつは、「帰属意識の二重化」の持つ可能性についてである。これまでは、日本人でなければ、〇〇人でもないものとして特徴づけられていた。しかし語りから滲みだしてくるのは、日本は好き、〇〇も大事、という二重化された帰属意識である。日本における国籍をめぐる法意識も日常意識も、単一帰属を要求するものであった。それによってアイデンティティのはざままでゆらぐ在日の若者たちが存在してきた。これからは二重国籍を認めていくべきだと筆者はまとめている。これが 1993 年の調査で明らかになった、青年たちが求める共生社会への第一歩にもなるだろう。

公務員の採用に国籍条項があるのは当然と言い、選挙権がほしければ帰化をすればいいという人たちは、その前提として、国籍の帰属はただ一つでなければならないと考えている。そして、そのまた前提にあるのは、二重国籍が認められないのは、いつか戦争が起きた時にどっちにつくかはっきりしない存在は困る、ということだ。しかし、二重国籍者というのは、絶対に戦争が起きては困る人たちのことだ。好きな国同士が戦争をしては困る。そういう人たちが増えることは、平和憲法に適合的だ。「在日」の若い人たちから聞き取りしていると、これからは二重国籍を認めていくべきだと、僕なんかは思うね。

(福岡安則 帰属意識二重化の可能性－「在日」若い世代の聞き取りから－ 2005)

3. 研究方法

3-1. 調査目的

福岡・金の意識調査は、「在日韓国人青年」の意識の全体的な傾向を調査データの分析結果から客観的に分析した研究であり、在日コリアン青年のアイデンティティの獲得の諸条件や複数からなる志向性について明らかにしたことの意義は大きい。しかし、この調査では「朝鮮籍」や様々な理由により「日本籍」を持つ青年については調査対象としていない。そのため、在日コリアン全体のアイデンティティ像として捉えることができるのかという点では疑問が残る。そして、量的調査によって一定の傾向は確認されたが、その具体的な個々の在日コリアン青年の姿を描き出すことがなされていないと思われる。

本稿では学生会の卒業生のインタビューを通じて、具体的な実像に迫っていく。在日コリアン 3 世に属する『学生会』卒業生のインタビュー調査からアイデンティティを獲得する過程を明らかにし、その条件を描き出すことを目的とする。学生会を卒業して成人してあらためて、学生会が対象者たちにとってどのような存在であったか、また、彼らの自我意識はどのように変化していったのか探ることを中心に、インタビュー調査を進めていった。

3-2. 調査対象

学生会自体に関する調査はこれまでにほとんど提出されたことがないため、同団体の特質について、まず簡単に説明しておかなければならないだろう。学生会は、在日コリアンは日本におけるマイノリティではなく、「朝鮮民主主義人民共和国のもとに結集した在外公民である」という立場を強調する、在日本朝鮮人総連合会の傘下団体である在日本朝鮮青年同盟が発足した会である。

同団体は、発足当初より朝鮮・韓国の国籍を問わず、日本の中学校・高校に通う在日コ

リアン学生を構成員として、相互の親睦と啓蒙などを目的とした活動を行っている。そしてそのもっとも主要な活動は、各地域を拠点にして開催される定例会である。

定例会の内容は地域によって特色が異なるが、民族史や民族言語の学習、主体思想の紹介、朝鮮半島や在日コリアンをめぐる社会情勢の討論、サムルノリや歌謡など民族芸能の習得、というように非常に多岐にわたっている。しかしその中でも、こうした活動の特色をもっとも典型的に示唆するものは、「談話（タムア）」と呼ばれる議論のスタイルであろう。

「談話」とは、年齢もしくは学年をもとにした序列が厳しい組織にありがちな形態ではあるが、活動を率いる指導員や学生会を卒業した OB が、在籍する学生と一対一で会談する場所を設け、日常的な場面における民族的な主体性の在り方を問いかけていくというものである。したがって対話のテーマは、日本人の友人への出自の宣言や、本名の日常提示の必要性などが中心となる。

学生会は、その活動の一貫として、毎年八月初旬に懇親と学習のためにサマースクールと呼ばれる合宿を実施している。この合宿はやや親睦の色彩の強い催しであり、普段は積極的でない構成員の参加が多くなっているものの、参加人数としては数ある催しのうちでも最大規模のものである。

同様の主旨を持った学生組織も少なくないが、その多くが単なる親睦を目的としたものであったり、書籍上の学習を主とするものである中、学生会に固有の特徴は、民族的な主体性を強く志向するのみでなく、それを日常的な場面において発露させるための活発な行動をとまなうところであるといえる。

本インタビュー調査の対象者として、韓国・日本国籍保有の両者をサンプリングしている。

3-3. インタビュー調査の概要

本稿では、学生会の卒業生（2002年度から2008年度までの卒業生）を対象に、7名にインタビュー調査を実施し、その分析結果を示す。先に述べたように、インタビューの目的は、学生会で学んだ青年たちが卒業してあらためて「学生会はどのような存在」であったのか、あるいは在日コリアンとしての自我意識はどのように変化したのか、の2点を探ることにある。これら卒業生のライフ・ストーリーを通じて、学生会の意義や、在日コリアンとしてのアイデンティティの方向性について検討する。

本インタビュー調査では、録音機器として、 아이폰のボイスメモを使用している。インタビューを行った7名の対象者の経歴は次の通りで、名称はすべて仮名である。なお、年齢順とする。

表 1. インタビュー対象者一覧

氏名	フリガナ	卒業年度	年齢	国籍	ダブルであるかどうか
任優希	イム・ユフィ	2003 年	28 歳	日本	○
高秀平	コ・スピョン	2004 年	27 歳	日本	○
金修勇	キム・スヨン	2005 年	26 歳	韓国	×
張美香	チャン・ミヒャン	2005 年	26 歳	韓国	×
高忠誠	コ・チュンソン	2006 年	25 歳	韓国	×
趙潤基	チョ・ユンギ	2007 年	24 歳	日本	○
金景太	キム・キョンテ	2008 年	23 歳	日本	○

表中のダブルというのは、両親の内的一方に韓国・朝鮮にルーツのない人種の親を持つ子供のことを指す。

対象者の内、日常生活で韓国・朝鮮の民族名を名乗っているのは高秀平、金修勇、張美香、高忠誠の 4 名である。

4. 調査結果および考察

4-1. 入会前後の様子

対象者たちが在籍していた頃の学生会の入会は小学校 4 年生からであった。学生会は任意入会であり、また学生会自体に出会うきっかけも様々であるから、個々によって入会時の年齢は異なっているが、概ね学生会以前に何らかの在日コリアンのコミュニティに関わりを持っていたようだ。年の離れた兄弟が学生会に在籍していたため、「自分もそこに行くもんやと思ってた。」と言う高忠誠は低学年のころに学生会と出会っている。また、中学生の頃に学生会に出会って入会した金修勇は「学校で民族クラブに入っていて、朝鮮のこと勉強したり、チャンゴとか叩いたりしててん。みんなで発表会やったり。引退してそういうのなくなって、なんとなく寂しかったんなあ。そんなときに学生会の動員が来てってちょうど良いしって感じやな。」と語ってくれた。彼のほかにも民族クラブや民族学級を経て学生会に入会した者が多く、ある程度自分のルーツを認識したうえで、学生会の入会に至ったようである。なんらかの民族との交流を通して民族に対して好印象を持つ出会いがあったということが、学生会の入会につながっていたようだ。

上の兄弟に付いていく形で学生会に入会した高忠誠を除いては、全員が中学校にあがったか、もしくは高校入学後に学生会に入会している。前述したが、学生会への入会は任意であり、民族学級などとは違って課外の活動であるため、学校の教師や親の意思とは別に、本人の意思が入会や入会後の活動継続には不可欠となってくる。入会の段階では、「民族学級も楽しかったし、なんか同世代の子らも多くて楽しそうやった。」(金景太) といったような軽い気持ちで始めても、彼ら自身に学生会への意義を感じなければ、少しずつ集まり

からは遠のいていく。実際にそういった者も過去にはたくさんいた。では、彼らはなぜ学生会の活動に携わり続けたのであろうか。

これに対する対象者たちの回答は共通していた。高校 2 年生の時から学生会に通い始めたという任優希は「学生会に入る前は民族学級に通ってた。高校に入ってそういう機会が減ってん。でも私は民族のこととかすごい興味があったし、普段は触れることのない世界にいるのは楽しかった。」と語る。

また、趙潤基は次のように語ってくれた。

「自分が知らなかった自分に関係することをめっちゃ知れるねん。普段、自分が考えんでもいいようなことをわざわざ考えさせられる。そういうの求めてたんかもしらん。自分の好奇心が高かってんな。自分自身への好奇心。自分がいろいろ知りたかったし、新しい環境に揉まれていく中で、新しい考え方が外から舞い込んでくるから。自分とは違うバックグラウンドの子はこう考えてるんやなとか。じゃ俺はどういう風に考えたらいいんやろうとか。同じルーツをもちながら違う環境にある友達との考え方の違いに興味があった。まじめにゆうたらそれやけど、人づきあいがしっくりきたな。」

彼がこう語ってくれたように、自分の一部を知るという点で、学生会を貴重な場としてとらえていたとする回答が多くみられた。民族学級や民族クラブでは深く掘り下げないようなことを、学生会では経験したという意見が多かった。また何より、彼が最後に述べてくれたように、学生会で出会う同じルーツを持つ先輩や友人との出会いも、学生会活動継続に大きく影響を与えていたようである。

4-2. 入会してよかったこと

この項目に関しては様々な意見があった。韓国人の父親、韓国人の母親を持ちダブルとして生まれた高秀平は日本国籍を持ちながら、在日コリアンとしての自我意識を強く持っている。彼はこの質問に対しこう答えてくれた。

「行かんかったら『スパイオン』っていうのは手に入ってへんかったっていうこと。本当の自分を持って言うとダブルの立場で微妙な発言になるねんけど、なかったもの、あん時 14 歳やったから、14 年間半分の自分も知らなかったわけで、それを知らんかったら知らずに済んだようなものやねんけど、それがあるということ知った瞬間、自分にもともとなかったようなものがあると気付いた瞬間、それに対しての部分っていうのがすごく強くなる。自分が半分もってる日本人というルーツを否定しているわけではなくて、ただ自分がもってるもう一つの半分を知ろうとする試みがあってん。」

当時の学生会では、在日コリアンの学生たちに自分の民族名（コリアン名）を教え、それを本名として大切にそれを恥じることなく生きていくことを推進していた。この推進活動は日本名を本当の名前ではない「通名」として考え、この民族名を「本名」として捉えるのだが、これについては日本国籍やダブルの学生への配慮が足りないということで、最近では、自分がルーツをもつ国の民族名を知ろうという目的で活動が進められている。

当時賛否両論はあったものの、彼自身はかなり肯定的な印象を持ったようである。日本国籍をもつ彼にとっては、民族の名前を知ることが、在日コリアンとしての自我意識を強く芽生えさせたようである。

数名の対象者は文化公演という名の発表会に出演したことを取り上げていた。

「文化公演ってあったやん。ホールでの発表。ああいうのはありやと思う。みんなで作り上げて体験するって、普通に暮らしてたらまずないやん。そういう意味ではいい機会はいろいろ提供してくれてると思う。きつい練習みんなですて何かを感じたり、ほかの演目の練習を見てこういう文化もあるのかとか。ここは日本にはない部分やなとか、そこは日本に似てる部分やなとか。いろんなこと感じてそれを近くで目の当たりにできたのはよかった。」

と、趙潤基は文化公演の印象を一番に挙げた。

この文化公演というのは普段の学習の成果を出すことを目的にし、手段として民族衣装をまとい民族文化を披露するものである。これは学生にとって、コリアンとしての自己を文化公演の観衆にさらけ出すことである。これは大きな晴れ舞台として位置づけられる。また、過去に学んだことのない民族の舞踊や楽器演奏との出会い、そしてその取得に仲間たちと真剣に取り組み、達成するという体験は、対象者の成長過程の上で良い影響を与えていると上記発言から考察される。

また、同じ出自を持つ仲間に出会ったことだと話してくれた対象者もいた。

「ウリハッキョ（朝鮮学校）に通ってる子と違って、日本の学校に通ってると、在日コリアンの友達が出来るとはあんまりないやん。でも学生会と出会って、こんなにおってんやって嬉しかった。日本人の友達もそら大事やけど、うちにしかわからんこともあるやん。そういうのを話し合えて共有できる仲間が出来たのは大きい。今でも連絡取り合ってる。」（張美香）

その他に対象者の中には、当時を振り返って学生会との出会いを肯定的に捉える発言が見られた。

「それはもし出会ってなかったら、自分の民族性を抑圧しながら生きてたやろうなって思う。民族性をオープンにしていいいことを教えてもらったな。普段生活しててウリマル（朝鮮語）とか使う機会ないし。だからそういうソンベ（先輩）とかいう言葉を使うだけでも、ウリハッキョ（朝鮮学校）行った子らからしたら、大したことないやん。でも俺からしたら、そんな簡単なウリマルが飛び交う場所にいれるということだけで、すごい文化を享受できる空間やし、文化を实践できてん。今思うとね。自分のアイデンティティの確立に、重要な意味を持ってた。」

こう述べるのは、在日コリアンの両親を持つ高忠誠である。彼は上の兄弟も学生会に通っていて、他の対象者よりも早くに民族と交流を持つ機会があったが、意外にも学生会に入会し活動するまでは、民族性を抑圧してきたという。それが、学生会の活動を通じていく中でなくなっていったことを、今になって感じると語ってくれた。

学生会が対象者たちにとって、在日コリアンとして生きることを決定付ける存在というよりも、自分自身が持つひとつのルーツを知り、それを享受してさらに肯定的に認め受け入れる場として大切に感じている部分が大きいことが、今回の調査を通じて感じられた。

4-3. 印象に残っているエピソード

学生会在籍当時の印象に残るエピソードを対象者に話してもらったところ、多くの対象者に共通して得られた気づきや葛藤についての経験があった。それは「本名宣言」というものについてである。前項で、対象者の一人が語ってくれた民族名についての件で少しふれたが、学生会では、在日コリアンの学生たちに自分の民族名（コリアン名）を教え、それを本名として名乗ることを推進していた。それを学生会では、「本名宣言」と呼び、当時の学生会では、最重要事項の一つであった。そもそも、学生会の目的は、在日コリアンの学生たちに在日コリアンとして堂々と生きていってもらうことである。「在日コリアンとして堂々と生きていく」何よりの証明となるのが、民族名を名乗り日本社会で生きていくことだったのである。そしてこの「本名宣言」は、学生会の一大イベントであるサマースクールで行われる。日本社会で民族名を名乗って生きていくことが正義で、日本名を名乗り続けることは自分を否定しているようなことだと謳われる。この「本名宣言」に関わる記憶が、対象者たちに様々な形で強く残っているようであった。

前項で紹介した高秀平のように、対象者は各自の「本名」について愛着を感じ大切に思っていることが今回の調査を通じて感じられた。しかしながら、その「本名」だけが、自分の唯一の名前であるという学生会の価値観に、賛同できずにいたようである。学生会には、片親に日本人を持つダブルの学生も在籍していたし、国籍が日本である学生もいた。そのひとりである趙潤基は次のように語ってくれた。

「本名宣言だけはほんまに……。あのシーンだけは本当に滑稽で。自分はど

っちか（日本か韓国）だけやとか考えたことない。どっちも持ってるし。今の環境からすると日本名で名乗る方がしっくりくるのかなって思うけど、民族名も大事やし。それを教えてくれたんは感謝してるよ。でも無理やりどっちかに決めつけることはしたくない。でも学生会は決めさせようとする風潮があった。それは嫌いやった。学生会と自分にはちょっと温度差があったな。」

卒業してからも学生会の OB として精力的に学生会に関わり続けている任優希は日本人の父親を持つダブルの日本国籍保有者である。彼女は当時の本名宣言についての記憶をこう語ってくれた。

「民族アイデンティティはチョソンサラム（朝鮮人）として持ってんねんけど、あなたの名前は何ですかって聞かれたら「田中優希（たなかゆうき）」やねん。民族名がある事実は大切にしたい。実際に「イム・ユフィ」っていう民族名も大事。でも本名宣言で、日本名を名乗ってるままじゃ駄目やって否定されてん。あの時はきつかった。みんなで名前について討論してても否定されるてるような感覚が強かった。」

また同じように、両親とも在日コリアンで韓国籍を保有する高忠誠も「本名宣言」には賛同しきれない部分があったという。

「大学から民族名で名乗るようになってんけど、それまでずっと高山忠誠（たかやまちゅうせい）。めっちゃ友達も多かったし、「ちゅうせい、ちゅうせい」って親しみ持ってもらってて、ずっと使ってきた名前で愛着は捨てきれへんかった。「本名」に変えるっていうときはすごい葛藤があったよ。絶対に自分が使い慣れてない方の名前やったし。そんで使い慣れてる方の「通名（日本名）」にすごい強い愛着があったし。その「ちゅうせい」で出会った人たちに、「コ・チュンソン」ってつかうから、そっちで呼んでくれって強制もしたくないし、その名前で出会った人はその名前と呼ばれたっていう思いがある。そういう感覚を持ってしまうのは、その名前でその人たちと出会ったから。でも複雑やねんけど、今の彼女は「ちゅうせい」で出会ってて、いつもそう呼んでた。でも僕は自分のバックグラウンドを高校卒業した時に彼女に言ってん。そしたらそれからたまたま「チュンソン」で呼んできて、それが嬉しかったりするねんな。それはどっちも自分やもん。韓国読みにしろ日本読みにしろ、自分の名前ってこと。」

民族読みにした名前だけが自分の「本名」ではないと感じていることがうかがえる。そして彼は印象に残るシーンについて話してくれた。

「サマースクールあるやん。あれって本名宣言する子を前でしゃべらすイベントあるやろ？あれあんま好きちゃうねんけど。兄ちゃんが出てんやん。兄ちゃんが前に出て、本名宣言する時の気持ちについて語るみたい。そんなときの葛藤っていうか。「僕はびくびくしてみんなの前で自分は在日コリアンであることと、自分の本名を言うのを怖がってた。みたいなことを言うのに泣いってん。それを見て何とも言えへん気持ちになったことだけすごい強烈に覚えてる。そんな時、中1とかやってんけど、そういうの見させられて、衝撃的やったな。本名ってなんやねんって。ダブルの友達の立場もあるし、そういうの嫌いやってん。他にも、日本学校だけに通ってたら、民族性を隠そうとする心理がすごい働くねんやんか。だから、そういう民族性を出す選択をした兄貴を見てなんかなんともいえん気持ちになったっていうのもある。」

対象者たちが、自分がルーツを持つ国もしくは民族の一つとしての韓国・朝鮮を大切に思っているものの、それ自体イコール自分という訳ではないということが伺えた。自分に関わりのある民族の知識を深めてくれる学生会に感謝し愛着を持っているが、疑問に感じたり葛藤する場面もあり、対象者たちの中では、ある意味第三者的な目線があったようだ。

4-4. 学生会を振り返って

対象者たちが学生会を卒業して成人した今、あらためて学生会についてどう感じているかを率直に聞いてみた。高秀平は、こう述べてくれた。

「コリアンとしてのルーツを認めさせてくれた。感謝してる。今となっては、今の学生たちに伝える立場になったけど、学生たちにコリアンのルーツがあるその事実をせめて知っていてほしいっておもう。教えてあげないといけないことやって思ってる。俺は、スパイオンがスパイオンであることを知らんようにされたくないねん。日本という国籍を韓国朝鮮に変えることはできないから余計にスパイオンという名前を知ったときにそれをつかんでいたくてたまらなかった。国籍=何人とは思ってへん。」

自分自身が学生会に入って自分のルーツを深く知ることができてよかったと感じたため、後輩たちにもその事実だけでも知っていてほしいという思いを持っていることが分かった。

「おじいちゃんとおばあちゃんが、韓国から日本に来て俺の母さんが生まれて、で、自分はその血をついでんねんやとおもったら、日本人として同化することはできるけど、それはちょっとだめやなって思ったから、それを考える場所でもあ

ったと思う。俺は学生会にかかわって、ちゃんとしっかり向き合えて考えて、なん戸惑いもなく、新しく出会った友達とか仕事の人とかにも、俺はダブルやねんって、お母さんが韓国に人やねんって（言えるから）、日本人として同化している学生がいるねんやったら、学生会が頑張って、きっかけを与えてあげたらいいねんやろなって思う。俺が出会ってそう感じるから。学生会に出会えてなかったら多分、そんな胸張ってすつとは、いえてへんかな。」

こう語ってくれたのは金景太で、彼はダブルとして日本国籍を保有している。彼は学生会に出会ったことで、気負いや隠すことなく、ありのままに自分の出自を話せることがよかったと語る。

学生会に出会ってよかったかという質問に対して高忠誠はこう答えてくれた。

「それは死ぬほど思う。それはだってもし出会ってなかったら、自分の民族性を抑圧しながら生きてたやろうな。もともと抑圧せんでもいいもんやとは思。民族性を隠さんでいいと思う。帰化したら、日本名にしやなあかんっていうのも、おかしいとおもうねん。僕は民族をオープンにしていいと思う。最初は民族名を、その音をみんなの前で発表するのはすごいはばれることやって、すごい劣等感があった。でもそれは間違ってた。多数派や環境がそうさせてただけで、僕はそれに屈したくないってうか。いつもオープンに出来るべきものやって学生会は思わせてくれた。学生会に通い続けてたのは、楽しいっていうのもあったけど、いつも自分のあんまり考えずに抑圧している部分、普通にしてたら考えずに抑圧する部分を、いつも思い出させてくれたから。学生会という場は必要。文化を実践するっていう意味で。普段生活しててウリマル（朝鮮語）とか使う機会ないし。簡単なウリマルが飛び交う場所にいれるということだけで、すごい文化を享受できる空間やし文化を実践できる。自分のアイデンティティの確立と維持において、重要な意味を持ってた。」

この質問項目では、数名の対象者たちが現在の心境として、日本社会と在日コリアン社会に対する思いを語ってくれた。

「在日コリアンという立場のおれたちが日本で生きていくために悩まなければいけないことが不思議やねん。そういう悩みを抱えずに生きていける社会を日本が提供してくれたなら学生会もいらん。日本で生きていくために在日社会からぬけるという手段を選ばなければいけないことに、どうかと思う。でも在日社会での同胞の関係性も見直さないといけない面もある。もっと仲間を増やしていきたいなら、体制を考えなあかん。」（高秀平）

「本当はいつか学生会がなくなればいいと思う。大切な場所やけど。在日コリアンとして堂々と生きれる社会が整えば、学生会は必要なくなる。そういう社会になればいいと思ってる。日本もコリアン社会も変わっていかないと。いつかそういう日が来るのを求めて活動してる。」(任優希)

この二人の言葉から、彼らが日本において他民族のルーツを持つ者として生きづらい現実を感じていることを伺える。また、在日コリアン社会に対して、多様化する在日コリアンへのより柔軟な対応を求めるのは、彼らがダブルであるがゆえに感じていることかもしれない。

また違う観点から高忠誠はこう語ってくれた。

「日本では、圧倒的大多数が大和民族。今思うのは、あの日韓併合前後で大量に大移動して、僕は、日本が多民族国家として生きていくことを選択したことやと思ってる。多民族国家になるっていうことを選んだんやったら、僕たちは民族性をオープンにしていいと思う。いま日本で日本人て言うのと、それはとても国家であるっていうことが前提で発せられる時がくればそんな気にしやんでいいんかなって思う。いつも国籍ってなんなんやろって考えてしまう。そんなん考えなく済むようになったらいいのにおもう。中国にも朝鮮分断の歴史で朝鮮民族が大量に流れてんけど、中国に住む朝鮮族の人たちは自分たちのことを中国人ていうねんやんか。朝鮮族の中国人だて。それで政府も中国国籍を与えてて。チベットはまた別の抑圧があるみたいやねんけど、中国では少数民族に対する教育の保障がすごいされてて、彼らは完全に朝鮮語がネイティブで中国語よりも朝鮮語の方が得意やねん。民族自決の考えがすごい悲願される一方で、ちゃんとしてる部分もすごくあって、なんかそれは本当に素晴らしいなって。彼らは全然抑圧されてないから、自分たちのことを中国人やっていえる。それは中国ていう国が単一民族国家じゃなくて多民族国家であるってことを前提にしているから起こりえる。日本人ていう言葉の響きは、大和民族を意味してしまうことが多いやん。日本はそれぞれの民族がしたいことを奪ってるやん。文化を剥奪してるやん。それが悔しいなって僕は思ってる。日本人て呼称するとルーツのある民族を放棄したていうイメージが強い。日本が早く多民族国家であるという自覚を持ってほしい。僕が日本人て呼称すると怒る在日の仲間もいると思う。でも僕はそれが気兼ねなく言える日が来てほしい。「コリアン系日本人」ていう言葉が浸透してほしい。」

日本に住む者として、「日本人」を自覚しているが、ルーツをたどれば韓国・朝鮮民族

である。自分の中に抱くこの両者の存在を肯定的に捉えることのできる社会を望んでいることが、彼の言葉から感じ取ることが出来る。

通常、移民や外国人が定住すれば、そのホスト社会に溶け込み、生活習慣や意識はマジョリティに同化するというのが定説であるが、対象者たちはむしろ、民族の習得やルーツに対する知識の獲得という態度をとりながら、「民族」へのこだわりを見せる。同化の生き方は選択していない。この行動は、民族的アイデンティティが単なる「継承」というよりも主体的な行動の選択による「獲得」の過程を持つという、福岡・金の仮説を実証している。また、対象者たちが今後を築く場としてすでに日本を選択していることや、その日本社会に対しての願望から、「日本への愛着」がみられたという結果も重ねることが出来る。それは3世4世が共生社会を目指す動きを見せるという、針子の原理を主張した李の意見にも沿った結果となっている。

4-5. おもいでの共通点

学生会については、「入会する前の様子」、「学生会に入会してよかったこと」、「印象に残るエピソード」を中心にインタビューした。ここでは、ほとんどの対象者が学生会に入会してよかったと感じていることが伺えた。特に「民族名を知ったこと」「文化公演で民族文化を披露したこと」は、今まで深く学んだことのない民族の学習を、最終的には親しい自己の文化として肯定的に受容する結果に結びついているのではないかといえる。A県学生会の特徴として在日の多住地域にあるということと、対象者たちが学生会の入会前に、何らかの形で在日コリアンのコミュニティに関わりを持ち、民族と触れ合う機会があったことも、見逃せない要因になっているのではないだろうか。

福岡・金の意識調査によると、在日コリアンの民族的アイデンティティは、在日コリアンの集団との情緒的な結びつきを重視する「関係志向」と、手段的な側面である「主体志向」とに分節化される。関係志向は伝統儀式などの実施を通して主に身内や家族内で継承されるという。他方で、主体志向は、家庭内外での教育を通じて、また、民族コミュニティへの参加や民族教育によって獲得されるものであり、家庭内で直接継承される部分はあまり大きくないという（福岡・金 1993年）。

そして、福岡・金は同胞同士のコミュニケーションを保障していくことが安定したアイデンティティ形成につながるものであり、教育に関しては、民族学校の規模の拡大や、公立学校における民族学級の設置・拡大、その他の民族教育の必要性を説いている。彼らの述べるように、民族教育としての学生会は青年たちに肯定的なアイデンティティを形成させる効果があり、彼らが民族について肯定的な立場をとっていることから、そのことを、本稿で明らかにすることが出来たのではないだろうか。

4-6. 現在の心境の共通点

学生会を卒業してからの対象者たちの心境は、それぞれの思いで揺れている。個々がそ

それぞれの歩みをしていながら、そこに共通しているのは、『「民族」をキーワードにしたアイデンティティの確立』と読み取ることが出来る。対象者たちが、学生会を通じて民族アイデンティティを手に入れた。それは、それぞれによって、自身の一部であるかもしれないし、全部であるかもしれない。在日コリアンとしてかもしれないし、韓国・朝鮮の民族性を持った日本人としてかもしれない。しかしそこには共通して、民族性を肯定的に受け入れ享受する動きが見られた。

先に述べたように、福岡・金は在日コリアン青年のタイプを 7 つに分けて分類し、その特徴について分析している。

しかし、今回のインタビュー調査での分析を通じて見えてきたことは、それぞれの対象者を単純に 7 つのタイプ分けにあてはめることは難しいということである。アイデンティティや個人の生き方は不変のものではなく、環境や社会の変化に乗じて、それらも変化していくものである。実際、個人の生き方や考え方は一面的ではなく、多面的に構成されているものであり、その時々状況に合わせて、福岡・金が言う 7 つの志向性を行き来しているのではないだろうかと考えられる。

彼らは多様な志向性を持ちながら同時に、同じルーツを持つ仲間との出会いやつながりを貴重に感じていることも共通点として挙げられる。そしてそれらのふれあいや交流は、多様な志向性と生き方を展開する在日コリアンにとって、自己実現の確信を持つ原動力として影響力を持つ。それぞれの対象者たちは、学生会での経験からその機会を得たことが、本インタビュー調査から明らかになったと考えられる。

4-7. 「コリアン系日本人」という可能性

調査対象者たちは学生会への参加を通じて、確実に朝鮮本土に関わる事象や文化に対して関心が高まっている。それは、本文で述べてきた調査対象者たちの発言からも読み取ることができる。しかしだからといって、彼ら全員が朝鮮人・韓国人として生きていくことを選択しているわけではない。自身に、生まれ育った国以外にルーツがあることを知り、それに対する興味や好奇心が働き、それを知らうとする動きは全員にみられた。その動きは個人によって異なり、新たな自分の一面として捉える者、本当の自分に出会ったと認識する者など、多岐にわたっていた。

その中で注目すべき点は、調査対象者のうち多数が、自己を確立するうえで「日本人」を選択していることであった。これまでの在日コリアンの研究は、あくまで「コリアン」ということに前提を置いて行われてきたものであったし、そのほとんどの対象者たちが自分自身を「韓国人（もしくは朝鮮人）」として呼称してきており、その堂々たる呼称に誇りを抱いていた点に特徴があった。

しかし本調査で明らかになったことは、在日コリアン 3 世に当たる彼らが、自身のアイデンティティに関して「日本人」を選択することを望んでいるということである。本文にも記述したが、現在の日本において「日本人」と呼称することは「大和民族」を連想させ

てしまうことで、朝鮮民族にエスニックアイデンティティを抱く彼らにとって、民族をすりかえられてしまうことは抵抗がある事象なのである。それによって、彼らは自身を表現するときに「日本人」と言わずに「在日コリアン」と言う。先に述べたように、学生会活動を通して、朝鮮本土にまつわる文化を彼らは肯定的にとらえているし、それを自身の民族性だということを認識しているのである。

しかし、日本で生まれ育ち、日本の教育を受けてきた彼らの価値観や生活習慣、そして第一言語などは、一般的な日本人とは何ら変わらず、自身を「コリアン」と称するには疑問が残るといえる。そこで今、彼らは朝鮮本土の民族をもつ「日本人」として自身を認識しはじめているのである。それが「コリアン系日本人」である。

しかしまだそれは私的なステージの話であり、公的に呼称し理解を得るには難しい。在日コリアン社会においては、日本と朝鮮本土の歴史問題によって、在日 1 世や 2 世が「日本人」と名乗ることに抵抗があり、3 世の新たな生き方への理解が困難だといえることがある。昔から日本国籍へ帰化することは、故郷への裏切り行為だとみなされてきていて、現在はその風潮が緩和されたものの、完全になくなったわけではない。国籍が全てではなく、民族を想う上で「何人であるか」が重要なわけではないと感じる 3 世の認識は、1 世や 2 世にとっては理解が難しい話なのである。

また日本社会においても、領土問題など様々な問題から、韓国・朝鮮に対して良いイメージを持たない人も多く、在日コリアン 3 世にあたる青年たちが「自分たちは朝鮮民族を持ったコリアン系日本人です」と呼称したところで、心ない人たちからの避難や中傷にさらされる可能性も低くない。

調査対象者たちは「コリアン系日本人」と堂々と呼称し、それが日本で浸透し受容されていくことを望んでいる。自身の人生の土台に日本を選択している彼らは、日本が真の意味で多民族国家になることを強く望んでいるのである。日本社会に対しては、民族や文化の教育の受容、「他民族系日本人」が日本国民として果たしている義務に対する権利の保障などを求めていることが挙げられるだろう。そして在日コリアン社会に対しては、「在日コリアン」の多様なあり方や生き方の受容や、日本社会と共生していく為の新たな関係の構築が挙げられる。新しい生き方を選択し始めた「コリアン系日本人」の青年たちは、日本と朝鮮本土の両者にアイデンティティを有する存在として、よりよい社会を目指して奮闘していくことだろう。

5. 結論

在日コリアンにとって、国や国家とは、人によってはかつての「朝鮮」であり、また人によっては「朝鮮民主主義人民共和国」（北）、あるいは「大韓民国」（南）であり、さらには現に暮らしている「日本」でもありうる。在日コリアンは、日本と朝鮮半島というふたつの国や民族、出自や言語、習慣や文化などを混在させている。彼らの中には、絶対的な

「朝鮮人」も絶対的な「日本人」も、絶対的な「在日コリアン」も存在しない。他者との関係性で自己は変わり、自己の生き方によって他者との関係性も変わってくるのである。日本社会の中で共生を図る中で、在日コリアンの若者がこれまでとは異なる葛藤に直面する恐れがあることも確かなことだ。

在日コリアンが自らを一つの民族として語るのは、ますます困難になっていくと思われる。これを、在日コリアン社会の日本人への「同化」であると考え、在日コリアンの存在が危機的な状態に向かっていると言う人も中にはいる。しかし対象者が語ってくれたように、日本社会で生きるために在日コリアン社会を抜けなければならないというような状況は回避していきたい。在日コリアンだけにかかわらず、マイノリティである民族集団が、日本社会の市民として主体性を持って生きることのできる社会を迎えたい。実際、マイノリティの存在がもはや無視できないものとなってきたのは誰しもが認めることだ。現に日本でも、1980年代以降、経済が急速に発展し、日本社会の多民族状況が顕在化してきた。日本社会とマイノリティの両者が共生を目指していくべきであろう。日本社会で言えば、日本が単一民族国家としてではなく、多民族国家としての自覚を持ち、マイノリティの民族保障を整えていくことが求められるであろう。

本稿では7名の学生会卒業生のインタビューからそのアイデンティティ形成の過程を見てきた。先にも述べたように、在日コリアンに限らず、マイノリティ集団が増加し多様化する現在、日本国籍保有者も含めた異なるルーツを持つ存在も視野に入れていく必要がある。多文化共生の教育の実施を持続可能なものにするためにも、多様なルーツを持つ者同士の間で共生をめざす教育の確立が必要であると言える。

福岡・金が主張するように、在日コリアンのアイデンティティ形成は、受動的な警鐘と能動的な獲得を繰り返す過程を経て確立されることが、学生会卒業生のインタビュー調査から伺えるだろう。他方で、従来の学生会活動は、「あるべき民族像」（民族の自負と誇り、祖国や民族集団との一体感など）を設定し、その尺度に基づいて、在日コリアン青年たちへの教育活動に取り組んできたということは否定できないだろう。青年たちの実態からみて現実と理念の格差があり、場合によっては青年たちのアイデンティティ形成にマイナスに働く作用をもたらすこともある。

今後、在日韓国・朝鮮人をはじめ、すべてのマイノリティの子供たちや青年たちのアイデンティティ保障に必要な方針として、「あるべき民族像」の追求から「多様な生き方や志向性を支援する教育」への転換が求められるだろう。本文でも例に挙げたように、たとえば、在日コリアンの日本名や民族名の選択、はたまた国籍の選択までも含めた、すべてをありのままのものとして受け止める体制が求められる。子供たちや青年たちのために必要なことを考える視点、つまり、多様性の尊重を主軸にした新しい民族教育の創造の中で、ひとりひとりに柔軟に対応していくことが必須であると筆者は考える。

本インタビュー調査の中で登場した「コリアン系日本人」という言葉から、対象者たちとなった在日コリアンの青年たちが、自らが生きる場として日本を選択し、その中で朝鮮

本土の民族を保有しているという誇りを、社会に堂々と表したいという思いを抱いているということが感じ取れる。そしていずれ近い未来に、「コリアン系日本人」、あるいは「○○系日本人」というような、これらの言葉が日本で浸透し、日本国籍保有者、他の国籍保有者にかかわらず、自己の民族アイデンティティを持ちながら、本当の意味で日本社会と共生していくことが出来る日が来ることを願ってやまない。

[参考文献]

- アンソニー・ギデンズ, 2004「社会学 第4版」而立書房
- ベネディクト・アンダーソン(白石さや、白石隆訳)、1997「増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——」NTT 出版
- 福岡安則, 2005, 「帰属意識二重の可能性—『在日』若い世代の聞き取りから—」『歴史の中の在日』藤原書店
- 福岡安則・金明秀, 1997, 「在日韓国人青年の生活と意識」東京大学出版
- 飯田剛史, 2002, 「在日コリアンの宗教と祭り—民族と宗教の社会学」世界思想社
- 金敬得, 2005, 「新版 在日コリアンのアイデンティティと法的地位」明石書店
- 金明秀, 1995, 「エスニシティの形成論～在日韓国人青年を事例として～」『ソシオロジ』124号社会学研究会
- 黒坂愛衣・福岡安則, 2008, 「越境する『在日』の苦悩」『日本アジア研究』第5号
- 野入直美, 2008, 「在日コリアンの子どもたち—生活史調査に見る仲間形成—」『利府ストーリーを学ぶ人のために (谷富夫)』世界思想社
- 李光圭, 2010, 「共生社会を目指して～在日韓人社会と日本～」大学教育出版
- 梁陽日, 2010, 「在日韓国・朝鮮人のアイデンティティと多文化共生の教育」立命館大学コア・エッセックス
- R.I.エヴァンズ(岡堂哲雄・中園正身訳), 1973, 「エリクソンとの対話——アイデンティティの探求—」金沢文庫
- 戴エイカ, 1997, 「多文化主義とディアスポラ」明石書店